

ゐのはな手話の会

遠藤 千鶴, 遠藤 佐知子

〈創立の経緯〉

ゐのはな手話の会は、1988年6月、顧問に公衆衛生学の安達元明教授を迎え、松林潤子氏を会長に小林久倫、徳永進、福岡恵、渡邊博之の諸氏（当時旧学1年）を中心に初期メンバー12名で発足した。ゐのはな手話の会発足の経緯は以下の様であった。

当時の医学部教育カリキュラムは、医学進学課程（医進）と専門課程がほぼ完全に分かれており、医学部生は、最初の2年間は西千葉キャンパスで教養科目を学んでいた。2年時には総合科目という必修科目があり、所謂学際的なセミナー形式の科目が選択可能であった。そして医進生の選択出来る総合科目には手話セミナーと点字セミナーがあった。

いずれも、当時文学部ドイツ文学専攻の教授であった故小島純郎先生（2004.10.10ご逝去）が、教鞭をとられていた。小島先生は現在盲ろう者として初めて東京大学教授になったこと等で有名になられた福島智先生を若い頃から支援され、父のように慕われていらした。

この二つのセミナーは医学生の人気が高く受講は抽選であった。受講生は後にゐのはな手話の会を創立することとなる松林潤子、福岡恵、渡辺博幸の諸氏（92年卒）であった。これらのセミナーは午後の最後のコマであった。その為授業終了後は研究室で、手作りの料理が振る舞われ当時の大学本学の手話サークルである「ウルトラマンの会」のメンバー、視聴覚障害やその他の身体障害の方々と共に、大変にぎやかで楽しい酒盛りになるのが常であった。

セミナー自体に試験はなかったが、容易に単位が取得できる訳ではなく、先述の「ウルトラマンの会」の上級生がセミナー受講生1人ずつにつき、夏休み中に特訓をし手話スピーチを練習し発表するという課題があった。また、「ウルトラマンの会」には、浜田洋通氏（当時旧学3年、90年卒）が在籍しており、今村光宏先生（現在静岡県盲ろう者友の会事務局）と共に、ゐのはな手話の会で手話だけではなく手話文化や障害など広く指導を仰いだ。

セミナーを終え、医学進学課程2年から亥鼻の専門課程に進学した際に、松林順子氏を中心に亥鼻地

区の文化系サークルとして手話の会を立ち上げようという機運が持ち上がった。そこから手話セミナー受講者であった福岡、渡邊両氏と共に設立の準備が始まった。この際に名称は『ゐのはな手話の会』とし、会を表す手話も作って頂いた。5月までに事務的な設立準備を行い、会としての実際の活動が開始されたのは夏休みに入る前あたりであった。活動は亥鼻同窓会館の2階を借りて、毎週木曜日の夕方5時半から小1時間ほど行った。

設立当初は旧学1年の初期メンバーが、今村先生、浜田氏をはじめとするウルトラマンの会の先輩方に、手話の基礎をご指導頂いた。具体的な活動内容としては手作りのテキストをつくり、先輩のマネをして覚えるというものであった。その後には中途失聴の女性や、近所に住む聾唖の方々を講師としてお招きした。どの方もつらい人生経験からにじみ出る温かいユーモアをもっておられる大変魅力的な方々であった。医学生という同質・同世代集団で狭い関係を作りがちな学部生サークルとは当初から雰囲気異にした集まりを育むことが出来たのは、学外メンバーの方々のおかげと言えよう。

会の活動の中では、教科書で学ぶ手話ではなく、実際の手話者の方をお招きし、生活の中で使われる手話、手話者の生活に触れることに、一番腐心した。会のメンバー各々が、西千葉の「サイダーの会」、千葉市中央区の「いちょうの会」などの地域の手話のコミュニティーに参加して、つながりを増やしていった。会のルールは「来るもの拒まず、去る者追わず」であり、他の運動部や生活のためのバイトを掛け持ちしているメンバーも多く、つながりは緩やかであった。この伝統は今でも守られ会の雰囲気を柔らかなものとしている。

〈発展そして現在へ〉

こうして、諸先輩方によって創設されたゐのはな手話の会は、その伝統を大切にしながら後輩の手によって受け継がれ発展を続けている。ゐのはな手話の会の発展を語る上で欠くことができないのは、亥鼻祭で手話会が例年行っている「Black Box」の歩みについてであろう。「Black Box」では視覚障害者

第5章 交友の広がり

の江藤昌弘氏をお招きし、亥鼻に設けられたステージの上で熱唱して頂く。そこに、ゐのはな手話の会のメンバーが歌詞に手話をつけて発表をする。所謂「手話ソング」あるいは「歌手話」の発表の場となっている。江藤氏の歌声は大変素晴らしく、亥鼻祭に訪れた人々がステージの前で思わず足を止めてしまうほどだ。視覚障害というハンデを負った江藤氏の美しい歌声と、聴覚障害を抱えた人々へささやかにでもメッセージを届けたいと願う学生のパフォーマンスが一体となり、観客へ訴えかけるものがある。

そんな「Black Box」だが、はじめから亥鼻祭の場で発表されていたわけではない。亥鼻祭は7年ほど前に復活を遂げたが、それ以前のおよそ10年間は亥鼻キャンパス内での学生祭は行われていなかった。従って、亥鼻を活動の拠点としている文科系サークル・ゐのはな手話の会は、日ごろの成果を発表する場を大学内には持っていなかったのだ。

では、「Black Box」はいつ始まったのだろうか。実は「Black Box」は元々、江藤昌弘氏や江藤氏の友人の方々が中心となって、独自に行われていたチャリティーコンサートのことなのである。江藤氏とゐのはな手話の会メンバーとの出会いは、はっきりとした記録や記憶が残されておらず、明確にはわからなくなってしまっている。憶測で語ることを許して頂けるのであれば、おそらく諸先輩方が「サイダーの会」や「いちょうの会」などの地域サークルと積極的に交流を持つ中、「日本盲聾者の会」とも深い繋がりができ、その中から江藤氏との親和関係を築いていったのではないかと思われる。そうして、ゐのはな手話の会のメンバーは年に1、2回ほど横浜などで行われる「Black Box」に手話通訳として参加させて頂くようになった。

そして、亥鼻祭が復活する。

「亥鼻キャンパスでも、発表の場を設けたい」「江藤氏の素晴らしい活動を広めたい」という先輩方の熱意に江藤氏が快く応えてくれた。こうして、2003年11月亥鼻祭での「Black Box」が始動したのだった。以降、「Black Box」はゐのはな手話の会の本質を映し出すかのように、伝統を守りつつ確実に進化を続けている。2008年には、広瀬陽介氏（03年卒・東京女子医科大学付属八千代医療センター小児科勤務）の計らいによって、八千代医療センターの納涼祭で亥鼻祭と同様な「Black Box」を行うことができた。八千代医療センターでの発表は、大変好評で今年（2009年）の8月にも引き続きお招きして頂けた。今後も、ゐのはな手話の会の新たな伝統として

続いていくことを願っている。

以上でゐのはな手話の会の発展の一端を述べてきたが、現在の手話の会についても少し述べたい。

現在、ゐのはな手話の会にはおよそ80名近い在校生が在籍しており、そのうちの30名ほどが日々の活動に参加している。ゐのはな手話の会は毎週月曜日と木曜日の午後6時から同窓会館を拠点に、勉強会を行っている。勉強会のスタイルとしては、会の発足当時のまま、後輩が先輩の指導を受けながらお互いに切磋琢磨していく方法をとっている。

基本的には、3年生を中心として新しく入ってきた1年生に独自に作成したテキストを元に、手話の単語を一つ一つ教えていく。時々、ゐのはな手話の会発足当時の交流をもっている聾者・鍵富孝氏が会に参加して下さり、その豊富な知識を分けて下さったりもする。

ゐのはな手話の会は発足時からの雰囲気大切に、いつも暖かくアットホームな中でコミュニケーションの大切さを学んでいるのである。その暖かな雰囲気はゐのはな手話の会が誇るべき特徴の一つであり、守るべき伝統であろう。

ところで、ゐのはな手話の会の特徴はもう一つある。それは、イベントの豊富さだ。ゐのはな手話の会では、以下のような年中行事を行っている。

- ・4月・5月 新入生歓迎イベント（BBQ、浅草めぐり、ボウリング、新歓コンパなど）
- ・6月 ウルトラマンの会との合同交流会
- ・7月 八千代医療センターでのBlack Box
- ・8月・9月 手話会夏季補習会、夏合宿
- ・11月 亥鼻祭でのBlack Box、幹部交代式、秋の温泉旅行
- ・12月 クリスマスパーティ
- ・1月・2月 追いコン、スキー旅行
- ・各月に誕生会

ざっと挙げただけでも、これだけの行事がある。行事には多くのメンバーが参加し和気藹々と交流を深めている。この行事の豊富さは、手話会の持つ「人とのコミュニケーション力を養う場」としての性質が、大いに繁栄されている故だろう。今後は、さらに「ウルトラマンの会」や「サイダーの会」との交流を深める場を作ったり、手話の技術力の向上のため「手話技能検定」の受検なども活動の中に組み込んで行きたいと考えている。

〈むすび〉

医学部135年の歴史の中でゐのはな手話の会の歴史はまだ浅いが、月日を重ねる毎にその活動の規模は広がっている。「来るもの拒まず，去る者追わず」の伝統を守り，緩やかで柔らかい会の雰囲気の中で，多くの医学部生・看護学部生が学部・学年の分け隔てなく和気藹々と活動している。顧問は，安達元明教授のご退官（02年3月）後，環境労働衛生学の能川浩二教授（06年3月ご退官），現在は分子生体制御学の木村定雄教授である。

活動を通して手話を学びつつ，学生はコミュニケーションの術やその大切さをも貪欲に学び取って

いる。その姿勢は将来，人を相手に医療を行う者達にとって大変重要なことであろう。もちろん手話の技術力を上げることもとても大切な課題だ。だが，ゐのはな手話の会ではそれ以上に人同士の関わりや交流を大切にしている。今後も更に活動を充実させ，会の発展のために尽力したい。

ゐのはな手話の会発足の経緯について執筆するにあたり，渡邊博幸先生（92年卒），長谷川信也先生（92年卒），池原甫先生（08年卒），江藤昌弘氏，鍵富孝氏に多大なるお骨折りを頂いたことに対して，ここに改めて敬意と謝意を表したい。

（えんどう ちづる，えんどう さちこ）